

(翻訳) 経学と諸子学の方法をめぐる章炳麟と胡適の論争について (下)

陳 平原 著

A Translation of the Chapter Concerning the Controversy over the Methods of Research into the Thirteen Classics and Hundred Schools of Thought of Zhang Binglin and Hu Shi in the Second Volume of Chen Pingyuan's Treatise

阿川 修三

錢穆 (1887~1990, 思想史家) や侯外廬 (1903~1987, 思想史家, 『中国思想通史』の編者) が指摘したように、「近儒で初めて戴震を尊んだのは章炳麟であり」、その『檢論』や「積戴」などは「近人の戴震の学術についての研究を啓発した<sup>(37)</sup>」のであった。戴震研究の今世紀の幸運に論究する場合、章氏の開啓(きっかけを作った)の功か胡氏の称揚の力を挙げねばならない。1923年、胡適、梁啓超 (1873~1929, ジャーナリスト、学者、政治家) と、錢玄同 (1887~1933, 音韻学者)、朱希祖 (1879~1944, 史学者) ら章炳麟門下が戴震生誕二百周年記念会 (1923年10月10日に発起し、翌年1月20日に北京で記念会が開かれた [『梁任公先生年譜』下、丁文江編]) を発起したが、これはこれに借りて「国故整理」の思潮のために提灯持ちをするという意味合いがないわけではなかった。これ以前、清代学術に言及する時、学者はきら星のごとく多士済々であったが、その後は「戴震の一人の天下となった」—この変化は一重に胡適が全力を挙げて称揚したことと大いに関係がある<sup>(38)</sup>。後の人が戴震研究の復興の原因を探ろうとすれば、必ずや章炳麟と胡適をそのキーパーソンとして捉えるであろう。

30年代、錢穆は『中国近三百年學術史』を著し、その中の戴震を論ずる章では、ただ章炳麟のみ取り上げ、胡適を無視したが、しかし、その中の多くの論断は明らかにその矛先を胡適の『戴東原的哲学』に向けていた。40年代、侯外廬は『近代中国思想学説史』を著し、この正面から展開されていない論戦を批評して、胡適は五四時代の孔家店を打倒した余韻を継承

して極力戴震の「反理学」を高く掲げようとして、甚だしい場合、それを「清代哲学の大本營の元帥」にまで推して、戴震思想を持ち上げたと述べた。一方「錢穆は胡適とは正反対に戴震の哲学の歴史的地位を軽々に抹殺した」が、それは過度に学問の継承に注目し、相対的には新機軸を出すことを軽視したための外にも、更に彼の護道的な主観的態度によるのであったのであるとした。侯外廬の定位によれば、戴震の哲学は胡適が言うような「哲学の中興」では決してなく、「僅かに限られた範囲内での清代初期の哲学の継承にすぎない<sup>(39)</sup>」のである。70年代、錢穆の学生、余英時は再び戴震とその学術思潮を肯定し、章炳麟、胡適、錢穆の諸家の学説を併せて採用し、その態度は割合超然としており、理学の優劣に触れることはせず、「儒家知識主義の興隆」という角度から「18世紀の考証学の思想上の意義」を強調した<sup>(40)</sup>。80年代、日本の高田淳もまた侯外廬を媒介として、章炳麟、胡適、錢穆の論争について再び提起したが、しかしその重点は四段階に分けて、章炳麟の「戴震論」を批評、紹介することであった<sup>(41)</sup>。

私の研究の重点は、章炳麟の「戴震論」がどの程度、胡適の学術思考回路に影響を与えたかにあり、胡適が「戴東原的哲学」を撰述したことだけには限定されない。1900年の「学隠」から亡くなる一年前の「諸子略説」に至るまで、章炳麟の著作の中で、戴震に言及したところは多いが、それは大体政治への態度、哲学思想、研究方法の三つに分けることができる。胡適は、人が多くの場合戴震を清代經学の大学者であることを知るが、彼が「朱子以後最初の大思想家、大哲学者である」ことを知らないと述べた<sup>(42)</sup>。その実、1923年、戴震哲学研究を始める以前には、胡適は基本的に彼を経学の大学者としてのみ扱っていたのである。たとえば『中国哲学史大綱』の「導論」では、「戴震以下の漢学家」が古籍に注釈を付けるのに規範があり、証拠を用い、憶測が少ないことに言及したのである。また、「清代学者的治学方法」では、戴震が『尚書』『堯典』の「光被四表」の「光」の字を論じたのを引用し、胡適の提唱した学問方法の最好例とした。

それが1923年の初めに発表した『『国学季刊』発刊宣言』では、清代には「経学者がいるだけで、思想家はいない。史書を校訂する者がいるだけで、歴史家はいない。ある著作の校注があるだけで、著作はない」ことを批判したものの、戴震、章学誠と崔述をその例外として挙げ、戴震哲学の価値を既に認識していたのである。このことはこれ以前に『章実斎年譜』を著し、この後に章炳麟門下生と戴震記念会を組織したことと関係がないわけではない。最も早く戴震の絶旨は名物制度の校訂にあるのではなく、人性を論じ善とは何かを問うという義理にあると強調した者に、前に章学誠がおり、後に章炳麟がいる。経学の研究方法と諸子の研究方法の論争が、胡適にどれほどの影響を与えたは言いがたいが、しかし続いて撰述した「戴東原的哲学」は明らかに章炳麟先生の啓発を受けている。

章炳麟先生が戴震を論じ、影響が最大だったのは、それぞれ「悲先戴」と「積戴」の二つの段に見える。

戴震は雍正帝の乱世に生まれ、賊の頭（雍正帝のこと）が士民を法律に拠らず、洛学（程伊川、程明道らの学問）、閩学（朱子学）に基づいて裁いたのをつぶさに見た。多くの殺された無辜の人々を不憫に思い、その無実を天に告発しようとした。その言論は痛切を極める。

戴震は幼いときから商売を行い、千里もの道のりを転運した結果、人民の生活の知られにくい苦衷をつぶさに知ったが、皇帝には恵みの言葉一つなく、そこで憤激して、『原善』、『孟子字義疏証』を著し、専ら平恕に努め、天に訴えた。法に拠って刑死した者にはまだ救いようがあるが、理に拠って殺された者は救いようがないことを明らかにした。

これ以前、東京の留学生歓迎会でも章炳麟は戴震の文を引用し、雍正帝の残虐は理学が助けたと述べ、併せてこれによって満州族の恨むべきことを証明した<sup>(43)</sup>。まさにこのような事情から、錢穆は章炳麟のこのような論述を「いずれも全く一時のかりそめの言である」<sup>(44)</sup>と解釈したのであ

る。「学隠」、「悲先戴」と「釈戴」を著した時、章炳麟はことによせて自分の意見を述べる意図がないわけではなかったかもしれないが、しかし、1914年に完成した「荀漢微言」でもなおこの説を堅持しており、「一時のかりそめの言」ではないことがわかる。更に説得力があることには、章炳麟は亡くなる一年前に「諸子略説」を著し、そこでも、なお今まで通り宋儒が「理で人を殺した」ことを批判したことこそ戴震の学問の主旨であることを強調した<sup>(45)</sup>のである。五四時代の孔家店を打倒した反理学家たちは本来章炳麟とかなり関連がある。章炳麟が戴震の学問の動機を探究したことについては、胡適の好みに合い、ほとんど全て受入れ、章炳麟との違いはただ『大義覺迷録』（雍正帝自ら反逆罪で捕らえられた曾静を尋問した記録を中心として編輯された書物、『清史資料』第四輯〔中華書局、1983年〕に全文所収）という資料を補充しただけであった<sup>(46)</sup>。

「戴東原的哲学」で宋明理学に言及する時、胡適はその歴史上の作用は好いものも悪いものもあったと述べた。侯外廬はこの説は根本的に成り立たず、「胡適の師とする章炳麟に教えを請わ」ねばならないと考えたのだが、戴震であろうが、章炳麟であろうが、「好い宋儒の理学<sup>(47)</sup>」とは一度も言ったことがないのである。侯外廬先生は多分「釈戴」から、章氏の理学への態度に変化があったことに注目していなかったのであろう。すなわち、彼は、戴震の「下から上を摩し、上帝が節を守り民が苦しむことのないようにさせる」という抗議精神を肯定しながら、一方で、欲は絶つことはできず、理と欲は別々のものではないという戴震の見解が廉節を否定し、奢侈を奨励することに必ずやなろうと考えたのである。だから、理学にも合理性があると考えた。「洛学（程伊川、明道）、閩学（朱子）は本来士人の身を慎ませるだけのもので、政治に関わるものではない。戴震がそれら理学を責めるのは、間違いである」。胡適は理学の合理性を「身を飾る」から「理性」、「平等」と「自由を争う」に拡大解釈した。このことが一人よがりな考えか否かは別のことであるが、章炳麟と全く正反対とは言えない。このことと関係があるのは、章氏が日々戴震と朱熹を調和させようと

し、それが胡適にもかなり影響を与えたことである。「荀漢微言」の中に次のような箇所がある。すなわち、

これ故に戴震の学術は朱子と相いれないように見えるが、しかし、その会通を見るに朱子学の幹蠱（父母が失敗したことを子どもがつくろう）する者は正しく戴震である<sup>(48)</sup>。

胡適の論法はこれと極めて近い。戴震は反理学であるが、しかし程朱と同じく致知窮理の学派に属したので、「戴震の学問は実は程朱の嫡流であり、また程朱の諍友であった<sup>(49)</sup>」と述べた。

或いはより注目すべきかもしれないことは、章炳麟の戴震顕彰が胡適の学術思考回路に影響を与えたことである。なぜなら、このことは既に述べた経学研究と諸子学研究の方法についての論争と関係がないわけではないからである。戴震の「学を求めること甚だ深く」、その著作の「規模広大なること<sup>(50)</sup>」は章氏の顕彰を待つまでもなく周知のことであった。章炳麟先生の「戴震論」の最大の特徴は、「原善」、「『孟子』字義疏証」の哲理性とその「元を晩周の大学者（荀子）に逆上った」という学問の風格を強調した点にある。章炳麟は次のように指摘した。「法として欲を除かない」と言うのは、とても「孟子の真意」とは言いがたい。実は彼の方法は老荘と荀子から取ったのである。ただ当時、「学者は老子、荘子、商鞅、韓非子を忌んだ」ため、戴震は「孟子を長子とする」ほかなかったのである。このように、戴震は孟子を「寓言」としたのに、章炳麟はそれを「牽強附会」と非難せず、その老荘に対する理解の浅さを非難した。というのは、これは「諸子学研究」に他ならず、「経学研究」ではないと彼が考えていたからである<sup>(51)</sup>。章炳麟はこれまで『孟子』を先秦諸子の一つと見做し、「清儒」の中で、『十三経』に論及し、「『孟子』は古の儒家であり、『十三経』から出すべきである」と述べ、「経的大意」では更に「『孟子』は明らかに‘子’部の書物である<sup>(52)</sup>」と明言した。戴震は当時『孟子字義疏証』

を著し、自らは経学研究と考えた。しかし章炳麟の考えでは、それはまさしく諸子学研究であった。諸子学研究である以上、義理を明らかにすることに重点を置くこととなり、「牽強付会」か否かは深く探究する必要もないのである。故に章氏はこの書物を評価するのに、優先順序があり、義理の観点から文を著したのであって、考証の観点から文を著したのではない。

「哲学」という言葉に保留を付けてはいたが、20年代以降章炳麟はやはり世俗に従い、「古代の哲学に関する書物は、諸子に最も多いのである」とも述べている。また「我が国の諸子学は現在の西洋の哲学に他ならない」とも断言している。だから諸子学を研究し、かつ「人欲を抑制しない」ことを主張した戴震は、章炳麟によって哲学者として論述されたのである<sup>(53)</sup>。章氏の世の注目を浴びた一連の講演は、彼と胡適との論争の一年前に行われた。胡適はこの講演に全く気を留めていなかったに違いない。さもなければ、章氏の経学研究と諸子学研究を区別するという問題意識に、このように彼が奇異に感ずるはずがない。返書の中で、胡適はなお「訓詁が明らかになってはじめて、義理は定めることができる」と強調し、章炳麟の意見を受け入れていないようである<sup>(54)</sup>が、しかしすぐ後に戴震に関する記述の中で、清代学術の評価について、その見解を明らかに改めているのである。先ず戴震の清儒の中での特異な点を強調して、「彼は単なる考証学者たるに甘んぜず、哲学者たろうとした」と述べている。戴震の学術上の思想が実現しえたのは、彼が明人の「虚しく心性を論ずる」ことに反対し、更に清人の「服の襞を繕うがごとき」瑣末主義にも反対したからであり、また「格物窮理の方法」を身につけており、その上に「哲学化の能力」も有していたからである。その次に、胡適は戴震の門下に彼の経学を伝える者がおり、彼の音韻学を伝える者がおり、彼の古代制度学を伝える者はいるが、ただ彼の哲学を伝える者がいなかったことを嘆いた。清儒は依然「服の襞を繕うがごとき」瑣末な仕事に没頭することに慣れ、哲学中興という大事業を受け継ぐことができなかったことがわかる。最後の「明志」は最も興味深い。胡適は戴震が結局国中の学者の陸象山、王陽

明の学問に傾向する趨勢に反対したがために、科学的「致知窮理」の哲学を提起した点を大いに論じた。ここでは、『戴東原的哲学』の学問上の得失を論ずるつもりはない。ただ次のことを指摘しておきたい。この「途中、何度も中断して、何度も推敲を重ね、二十ヶ月を経てやっと脱稿した」長文は、ただ「戴震論」の上で章炳麟の影響を受けただけではなく、「学問方法」と「学問の効能」の理解の上でも、章炳麟の影響を受けていたのである。たとえば、章氏の經学与諸子学と方法論を区別する点では、胡適は「經学者は古えの教典の本来の意義を探究すればよい。哲学者はこのような歴史的考証に限るべきではなく、独立して自己の見解を發揮し、自己の体系を打ち立てるべきである」と述べた。また、たとえば、章氏が清人の戴震が考証によって義理を論じようとした点を理解できなかったことを批判したことについて、彼は「もし考訂の学が義理の旧説を修正できなければ、どうして考訂の必要などあろう<sup>(55)</sup>」と述べた。しかし、このような章炳麟の影響はただ胡適に清代学術の得失について比較的深く理解させ、併せてある期間「漢学化」に度の過ぎる傾向に警戒心を持たせ得たに過ぎず、その基本的学術思考回路を変えさせるまでには至らなかったのである。

## 五

章炳麟こそは清代古文經学の大家であり、彼の文字音韻学、彼の仏教による老子、莊子の解釈は、清代学術の枠組みを超越している。だから梁啓超は「正統派の研究方法を応用して、その内容を拡大し、新しい道筋を開拓したのは、誠に章炳麟の一大成功であった」と述べたのである。また、梁氏は清代学術を論ずる際に章氏と共に「績溪の諸胡氏の後裔」の胡適のことを取り上げ、彼のことを「清代学術の方法で研究し、正統派の遺風がある<sup>(56)</sup>」と言ったのである。一人は「清代学術を超越しており」、一人は「正統派の遺風があり」、この二事は章、胡両氏の学術の背景の違いを明らかにしている。清代学術を飛び出した章炳麟と、清代学術を継承しようと

した胡適とでは、清代学術の評価にかなり大きな隔たりがあったとしても、決して不思議なことではない。というのは、人にはそれぞれ「期待視野(パースペクティブ)」があるからである。小学、史学、哲学いずれにも興味を持ちながら、一度もきちん経書を研究したことがない胡適が、経学を主体とする清代学術を議論すると、どうしても隔靴搔痒の感を免れない。都合のよいことには、所謂「経学研究と諸子学研究との方法をめぐる論争」は実際経学そのものとはそれほど関わりがなく、愈樾のごとく「『群經平議』の凡例で『諸子平議』を著す」という方法で満足できるか否かを主に討議するものであった。

胡適と、経学と諸子学との研究方法をめぐる論争をする一年前に、章炳麟は文をものし、当世の人が「諸子を好んで語る」、すなわち「いい加減なことを行い、名声を求める」風潮を批判し、更に諸子学研究は経学研究や歴史研究よりはるかに難しいとも述べた。

諸子学の訓詁は並外れて難解で、小学に精通していなければ、理解できない。その言論は救世の為に発せられており、歴史に造詣が深くないと、理解できない。版本の変遷には出入りがあることがあり、六経や多くの歴史書と照らし合わせて、校勘しないとついにはその版本の変遷を明らかにできない。近人の王念孫、戴望、孫詒讓の諸公は、いずれも古訓を真摯に探究し、その成就是卓越している。そして、その後始めて思い切って諸子を研究した。しかし、その文義を明らかにし、その版本の変遷を知ることは、やっとおおよそのところまで行き着いたにすぎなかった。その意味の分かりにくい所は、後の人を待つほかないのである。かの内に心性を指し、同時にものの委曲を明らかにし、外にものの成敗利鈍の原因を推し量ることは、どうして容易であると言えよう<sup>(57)</sup>。

諸子学の研究が困難な原因は、文の意味が分かりにくく、版本の変遷がはっきりしない他に、更に哲理を理解する者は、内なる人間の哲理を知り外な



る社会を知らず、歴史を理解する者は、外なる社会を知り内なる人間の哲理を知らないからである。章氏が諸子の研究の難しさを強調したのは、時の弊害に照準を合わせ批判すると同時に自分を揶揄する意味もあったのである。胡適の質問に答えたとき、章炳麟は王念孫、俞樾が經学研究の方法で諸子学研究を行うのは、「第一段階としてならばよい」と言ったが、これは決して一時の血気にはやっぴい加減なことを言ったのではない。杭州詁經精舎出身で厳格な樸学の訓練を受けた章炳麟は当然ながら「その文の意味を明らかにし、その版本の変遷を知る」ことの重要性をよく知っていたが、ただこれら初歩の努力については事細かに言う必要はないと思っただけのことである。当世の人が「諸子を好んで語る」風潮に対して、章氏は「その文の意味を明らかにする」ことを強調した。胡適が訓詁に限ったことに対して、章氏はまた「内に心性を指す」ことを強調した。「樸学を根底とし、玄学によってその学問を拡大した」章炳麟<sup>(58)</sup>は諸子学研究に欠くことのできない二大素養を兼ね備えていた。だから、「諸子を精緻に理解しようとすることは、誠に容易ならざることである<sup>(59)</sup>」と依然として嘆きもしたのである。「若年經学を研究するに樸学の立場を厳守した」章炳麟から言えば、諸子学研究の容易ならざる点は、主に「玄言」にあるのであって「名物」にはないのである。『蕪漢微言』や『自述學術次第』の中で、章氏は彼の学問が經学、史学、政術から仏教学、老莊へ向かったことを自分の學術変遷の鍵としたのであり、かつ「中国、インドの聖哲の義理の要諦は東洋、西洋の哲学者の説に他ならない」ことを悟った時の喜び<sup>(60)</sup>を力を込めて誇張したのである。このような、「玄理を清談する」ことを頑に追究したのには、実は章炳麟先生の自己反省と言う含みもあった。1900年、ちょうど學術の轉換の時機に当たっていた章炳麟は、学者には二つの欠点があり、一つは「実を病む」ことで、この場合は吐き出すべきであり、もう一つは「虚を病む」ことであり、この場合は補うべきであると述べた。

私は若きより漢学を研究し、かなり実を病んだりもしたが、数年来、玄理を清談することで心の汚れを洗い落とし、今では邪なるものは既に悉く洗い流した<sup>(61)</sup>。

正に漢学家の「実を病む」ことを深刻に受け止めていたため、章炳麟は敏感にその時、既に天下にその名声が知られていた胡適とその『中国哲学史大綱』との学術上の欠陥に気づいていたのである。

胡適の状況はちょうど章炳麟と正反対であった。章氏の言い方を借用すれば、大体「虚を病む者は当に補うべし」に属する。アメリカ留学の官費生試験に、彼の考証学の論文が役に立ったと言っても、実際胡適が幼少より受けたのは新式教育であり、漢学には決して基礎がなかったのである<sup>(62)</sup>。彼の留学日記の中で漢学について述べた部分は、哲学について述べた部分よりもまだ多い。と言うのは、後者(哲学)は彼の専攻であり、ちょうど博士論文の執筆中であり、前者(漢学)は独学であり、ただ細々とした感想をただ記すことができただけであるからである。胡適の学問の興味はもとより広いが、しかし、「哲学を専攻し、中国、西洋を兼ねて研究すること、これこそが私の選択した仕事である<sup>(63)</sup>」。留学生たる胡適が、漢学を研究することは、「補課」と言うことができるだけである。もし、このようであれば、甚だ得難いことでもあった。特に「中国人が西洋人を天帝のごとく尊敬し、また、洋書を神聖なるものと見た」時代においては。だから、蔡元培が『中国哲学史大綱』の序を著し、先ず表彰したのは胡適が「西洋の学問とともに漢学をも研究できる」ということにあった。「哲学」については、他でもない胡適の専攻であり更に言うまでもない。胡適は大体このような考えを持っており、『中国哲学史大綱』第一編である「導言」で、哲学史を執筆する場合、「明変(変化を明らかにする)」、「求因(原因を追究する)」、「評判(評価する)」の三部分を包括することを論じたが、しかし重点は資料の収集と検討に置き、自分の哲学的立場については却ってはっきりと定義していない<sup>(64)</sup>。樸学出身の章炳麟に比べ胡適

の哲学に関する訓練は、より系統的で、より完備していると言うべきである。若年の「哲学を中核とし、政治、宗教、文学、科学によってこれを補う」学問計画から、晩年の口癖である、哲学は私の「職業」であり、歴史は私の「訓練」であり、文学は私の「娯楽」である<sup>(65)</sup>に至るまで、胡適は一貫して哲学研究を第一の選択とした。しかし、世の人は彼の哲学史の論著について、考証に偏り、思弁の上で文を著していないと論ずる。蔡元培は『中国哲学史大綱』の四大長所を指摘し、先ず第一点に「証明の方法」即ち年代を考証し真偽を辯別する漢学の素養を挙げている。また、馮友蘭(1895~1990、哲学者)は胡適のこの書物を「漢学の長所があるとともに、漢学の短所がある」と述べている。「史料の真偽や文字の考証には、多くの紙幅を割きながら、肝心の哲学者たちの哲学思想には、それほど透徹して書いていないし、それほど細緻に書いていない<sup>(66)</sup>」。胡適、馮友蘭の二人はこれまで哲学思想と研究方法において、大いに異なっており、その上、馮氏のこの説はこの書物の出版の数十年後に出された。しかし、感情的争いという点を除くと、馮の説には依然合理的な面がある。胡適が哲学を重視しながら、実証に偏り、且つ「漢学」によって世に知られたのは、その原因を胡適がしっかり心に留めて忘れないプラグマティズム哲学に帰するよりは、そのハックスレーの懐疑主義、デューイの思惟方法によって中国・西洋の考証学の思考回路を混ぜ合わせて出来た「科学的方法」に遡るのが妥当であろう。

『中国哲学史大綱』が当時「驚天動地」の衝撃を与えたのは、「諸説をなで斬りにし、老子、孔子から説き起こし」「三皇五帝でいっばいの頭」に大打撃を与えたほかに、更に「思想を時代順に並べ、それらの論旨を比較検討する」などの「系統的な研究」によって、中国哲学の次第に変化発展する筋道を明らかにしたことによってである<sup>(67)</sup>。蔡元培が言う如く「中国の古代学術について、これまで系統的な記述が編まれたことはなく、近人が哲学史を研究するには、西洋人の著述形式に依らないわけにはいかなかったのである。今世紀の初めには、その種の著作に、梁啓超の「中国

史叙論」と章炳麟の「中国通史略例」があり一後者の『尙書』、『国故論衡』と『齊物論釈』などは一層精彩にとんだ哲学史論であるが、しかし、現代の意味での「哲学史」ということになると胡適の大著から説き起こさないわけにはいかない。胡適は先人の著述が「支離瑣末に流れる」ことを批判し、自ら「私がこの哲学史を著す最大の過分なる望みは、各家の哲学を融合貫通させてそれらを各々首尾一貫した筋道を持った学説として著すことにある<sup>(68)</sup>」と述べている。五四文化運動以後の学術的著述は「筋道」と「系統」を重視し、伝統的な、詩文の批評や札記、注疏のような「体系的でないもの」を軽視し、甚だしい場合には「研究の正道をこれまで歩んだことがない<sup>(69)</sup>」とまで誇ったのである。このような状況では、胡適が国故整理を提唱し、特に「筋道の通った、系統的整理」を重視したとしても、何ら不思議ではない。古人には「歴史が進化するという視点」が乏しく、その学術思想と著述には「筋道が通っておらず、首尾一貫しておらず、系統的ではない」ので、「ごちゃごちゃした中から一筋の筋道を探し出し、少しも手がかりのない中から、因果関係を探し出さなければならない」。このような研究は、哲学史に内在する「歴史的系統」を組み立てることを帰結としている<sup>(70)</sup>。つまり、胡適の提唱した「現代学術」は、ただ学問方法に亘るだけでなく、著述スタイルをも包含しているのである。『五十年來中国之文学』の中で、二千年の中国学術史上には、著述スタイルがしっかりしていて、「内容と形式の両面が、いずれも‘一家言を成し’得ている」のは、『文心彫龍』、『史通』、『文史通義』、『国故論衡』などの寥々たる七八部の著作しかないと述べた<sup>(71)</sup>。胡適は、伝統的学者が著作をものする時に、著述スタイルを重視せず、論証に乏しく、「結集」、「語録」、「稿本」という形を取ることに大変不満で、その『中国哲学史大綱』、『白話文学史』などの「新式史学」が中国の学界に新天地を開くことのできることを望んでいた。この種の「新史学」は胡適が従来主張してきた文章の簡潔さ、思考回路の筋道だった明晰さの他に、著作を章節に分け、引用文にその出処を明記し、標点符号を付け、参考書目を列挙し、「抛をやめて、

証を用いる」などの西洋の学術論文の著術方式をも包括していた<sup>(72)</sup>。蔡元培と張蔭麟のこの二冊の先駆的書物への批評から、胡適の「試み」が甚だよい効果を収めたことがわかる。陳寅恪が当時の哲学史研究者が過度に「筋道の通ること、系統的なこと」を求めるあまり、「古人の学説の真相」から遠ざかることを批判したことについては、他の問題に亘るので、後に論ずることとする<sup>(73)</sup>。

ところで、章炳麟が胡適への褒揚にどのような感想を持っていたかはわからないが、しかしこのような著述スタイルの「欧化」、或いは「科学化」という傾向は、実のところ章氏の大いに是としなかったところであった。1902年、章炳麟は梁啓超へ書簡を送り、「中国通史」について語ったが、その中で日本人が西洋の著述スタイルを模倣して著した中国史を「宏旨に係わらない」と批判し、「要するに日本がこれを著したのは教科書とするため、故に著作として扱うわけにはいかない<sup>(74)</sup>」と述べた。日本での講学時代、章氏は、当時の人々の中国史学が科学に合致しないと言う批判に対して、却って、その中国史の冒頭の「歴史の系統、歴史の性格、歴史の範囲」というのは、「調子のよいお喋り」であると誇ったのである。章氏の考えでは、中国と西洋の歴史の発展は異なるし、著述スタイルも当然大いに違いがあるべきであるということになる。すなわち、西洋には「哲学史」があり、一方中国には「学案」があり、西洋には「文学史」があり、一方中国には「文士伝」があり、どちらが高くてどちらが低いとは言えないのである。ただ、現在、初学者の便を図るため、繁を削り簡を旨とし、筋道の明晰な教科書を編纂しないわけにはいかないと言うに過ぎない。しかし、これは理想的な著述とは言えない。本来「教科の書」は「著作の書」とは異なり、「簡約」を求め、「繁雑」を求めない。故に容易に「科学」が現れるのである。

もし、科学に合致する歴史と言え、ただ簡約に重点があるだけである。それならば、科学に合致したならば、却って「靴に合わせて足を削

る」という本末転倒のことにならざるを得ず、却って科学に合致しない方がよいのである<sup>(75)</sup>。

章氏は新式教育にかなり不満であり、「それは同学の徒を求めて、学会を設けるに遠く及ばない」と考え、故にその生涯で困苦憂患の中にあっても、三度も国学講習会の設立を提起し、実際に運営もしたが、しかし大学で教えようとはしなかったのである。その理由として、「幼いころより独立独歩の道を歩くことを好んだ」とか、志を屈して提学使（視学官に当たる清代の官職）の属吏たるを肯んじなつたとか、学校が「出世の手段」となつたことへの不満の他に<sup>(76)</sup>、より重要なものとしては、学校の教育の根本理念を軽視していた点が挙げられる。

学校制度の欠点は、人が速やかに理解することを期して、その根底を追究することがなく、その結果から専ら耳から入る学問を重んじ、目から入る学問を遺棄することとなり、ついには学生の知るところは講義録を出ることができなくなる点である。

この攻撃の主要な矛先は「最もだらしなない」文科に向けられた。なぜかと言えば、それは文学や哲学を論ずる時、ただ「西洋の文」を証拠として引用することしかできず、「道を明らかにし性を定めという大いなる術」を理解できないからであり、またただ筋道の明晰な教科書を著すことだけしかできず、「その根底を探究し」「その奥義の核心を摘出する」ことができない<sup>(77)</sup>からである。ここでは暫く二種の著述スタイルと二種の教育体制の利害得失の追究<sup>(78)</sup>については置くこととし、ただ學術思潮の視点から、章炳麟、胡適の論争を理解することとする。

## 六

章炳麟の受けたのは、伝統的書院教育であり、自ら「私の学問は、師匠

に講義を受けたり、友人から学んだが、研究上の方法は憂いや苦しむの中から得るものの方が多かった」と述べた<sup>(79)</sup>。新式教育は完全に講義に寄り掛かっており、学生は耳からの学問に囚われるとし、章氏はこれでは多くの場合些かの高等なる知識を身につけ得るに過ぎず、玄妙なる哲理を決して探求しようがないと考えたのである。章炳麟の考えでは、哲学研究は經学研究や史学研究とはその方法が違うのであり、「直観によって自得できなければ、それは決して本当の‘哲理’ではないのである<sup>(80)</sup>」。半年後、梁啓超も、国学研究には、二つの重要な方法があり、すなわち、一つには客観的な分析を重んじること、一つには内省の努力を重んじることでであると述べた。しかし、梁氏の「内省」とは主に「躬行実践」に対するものであり、「玄言哲理」ではない<sup>(81)</sup>。但し、一致している点もある。それは胡適らの「科学」を重んじ、「会心」を重んじない研究方法には、いずれもあまり同意できなかった点である。これ以前、章、梁両氏はいずれも胡適の『中国哲学史大綱』について評論を発表し、梁啓超はこの書物は知識論に長じ、宇宙論、人生論において劣っていると述べたが、このような批評は実のところそれでもなお遠慮していよう<sup>(82)</sup>。一方、章炳麟の批評は更に彼にとって致命的であった。

諸子学は、本来理解するのはなかなか容易なことではない。常にその主義主張のありかを見ねばならず、そうすることで初めて本当に理解できるのである。ただ一二文のよさそうなところだけを読んだのでは、これは断章取義の仕業であり、その本意と関わるとは限らないのである<sup>(83)</sup>。

「悉く見解がある」などという褒め言葉を少し言ったとしても、この評語は胡適の学問方法を否定したに等しい。章氏は学問研究の方法として、これまで一貫して「その根幹を理解すること」、すなわちこの書簡で言う「その主義主張のありかを見る」ことを主張し、「文章の片言隻語を取り

出す」及至「断章取義」のやり方には大いに同意しなかったのである。日本で講学した期間、何度もヨーロッパや日本の「漢学」を攻撃したが、その中で重要な話題はその根幹を認識せず、ただ瑣末なことを掘り返すことをあざ笑ったことであった。晩年、甲骨文や疑古史学を攻撃したのもその「ただひたすらに重箱の隅をほじくる」式の研究方法、態度に不満であったことと関係がある<sup>(84)</sup>。ここでは当時の新旧両派の学者及び東洋西洋の異なった、それぞれの学術的思考回路と著述の形態の違いがはっきりと具体的に表われている。

胡適はこの点に十分な自覚があった。1922年8月28日の日記で自分のことをも「半新半旧の過渡的学者」と謙遜して言ったが、重点は王国維(1877~1927, 史学者、文字学者)、羅振玉(1866~1940, 文字学者)、葉德輝(1864~1927, 書誌学者)、章炳麟を「旧式の学者」に列し<sup>(85)</sup>、併せて章は「學術上既に半死半生であり」、羅、葉の著作にもまた「条理系統がない」と断言することにあつたのである。胡適は梁啓超を自分と同じく「過渡期の学者」に列した。それは梁氏の著述は言語からそのスタイルまで同輩の学者の中で最も欧化していたからである。『菑漢微言』のような、内容は深いが形態は雑多な著作は、確かに胡適を満足させることはかなり難しかったのである。胡適の著作が筋道を立てて細かく分析し、論証が精確であるという点は、現代中国の学術思想の発展の方向性を代表した。しかし章炳麟の批判にも道理が全くないわけではない。特にその研究をする時の「個人の感受性」や研究対象の「論学宗旨」を重視する点は、胡適の「提唱」の足らざるを補い偏向を正すものと考えられる。章炳麟は晩年『制言』に再び「以後の国学進歩」の四大方法を論じ、当初「国学講演」を行った時に論じた経史についてそれぞれ別のものであるとただけであった。一方、胡適は晩年の口述自伝でも、『国学季刊』発刊宣言を概ね書き写した。以上のことから章、胡両氏はいずれもこれらを「国学を研究する‘宣言’」としている。これら二つの宣言はいずれも三大対策を提起しており、大まかに比較しても構わないだろう。すなわち、胡適の構想では歴



史的視点、系統的整理と比較研究を突出させ、各学問共通の「科学的方法」を重視した。一方、章炳麟の構想は、經学、文学、哲学は方法がそれぞれ異なっていると区別し、各学問自身の特徴を重視した。以上のことから、章炳麟と胡適との論争は、ただ經学研究と諸子学研究には違いがあるか否かという程度のものでないことがわかる。世界で通用する共通の方法を提唱した胡適は、その各種各様の著作はいずれも方法論の文章として読むことができる<sup>(86)</sup>と強調し、だから「‘方法’は實際私の四十年来の全ての著述を支配したのである」。一方、異なる民族、異なる学問の研究には異なった研究方法があるべきだと主張した章炳麟は、具体的問題を解決するには満足していなかったが、しかし、戴震のしたごとく著述を著す度に「凡例を作り、まず規範を立てて、後の人がそれに付け加えたり、それを取ったりするのを待つのである<sup>(86)</sup>」。いずれも、人に学問研究の方法を教えんとしたのであるが、「方法」は各学問の共通性を重視するが、「凡例」はより多くの場合、具体的課題という特殊性に考慮しなければならず、ここにかすかに章、胡両氏の思考様式の違いがわかるのである。

章氏の批判に対して、胡適先生の弁解は、「諸子の明らかにした義理は、どうして一つとして歴史家の言う事実でないことがあろうか」と言うものであり、全ての思想学説を「史料」とし、或いは「事実」と言って研究したのが、胡適の一貫した思考回路であった。この「公平な視点」は胡適に国学の研究範囲を大いに拡大させて、「上は思想学術の大なるものから、下は一つの字、一首の山歌の細かいものに至るまで」、いずれも同等の研究価値を持たせたのである<sup>(87)</sup>。しかし、胡適のこの説はただ「ある学派はどのような義理を持つか」という「極めて重要な事実」を重視し、相対的に「義理」自身の内包をなおざりにし、「哲学史」を「社会史」と同等にみる傾向がかなりあった。このことは、たとえば、その禪宗史を研究して教義を論ぜず、『水経注』を研究して地理学を論ぜず、『紅樓夢』を研究して芸術性を論じないということである。胡適が目にしたのは、一貫して「本文」の生まれた歴史であり、「本文」そのものではなかった<sup>(88)</sup>。後輩

の馮友蘭は正にここから抜け出そうと努めたのであり、その『中国哲学史』の「自序」の冒頭に「私は歴史家ではないので、この哲学史は「哲学」の領域を比較的重視している」と述べたのである。陳寅恪（1890～1969、文学史家）、金岳霖（1895～1984、哲学者）はこの書物のために「審査報告書」を作成したが、それは馮の著書が「神游冥想（魂が自由に諸所を経巡り、瞑想する）する」ことができ、古人の立説の孤旨を「つぶさに理解し共感した」ことを表彰するとともに、あからさまにまた暗に胡適の『中国哲学史大綱』の「違和感を覚え、誇大化を感じる」、まるでアメリカ人が中国思想を論じているがごとき<sup>(89)</sup>点をも批判したのである。

ここには、中国哲学への理解の深淺の他に、更にもどのように研究上の「西洋の視点」を扱うかという問題をも包括している。胡適は『中国哲学史大綱』の「導言」で次のようにはっきりと宣言した。

我々が中国哲学史の史料を貫通して整理しようとするれば、別の体系の哲学を借用して、変化を解釈する道具としないわけにはいかない。

『『国学季刊』発刊宣言』の中で、提唱した「比較研究で国学の史料の整理と解釈を助ける」というのも、正にこの意味である。金岳霖は、普遍哲学を全く省みないで、所謂「特別な学問」である中国哲学を論ずるべきでなく、現在の中国の学者が完全に「西洋の学問の影響」からは完全には脱しえないことを認めたが、しかしできるだけ「牽強付会」を避けなければならず、特に胡適のように「一つの哲学の主張に基づき」哲学史を書いてはならない<sup>(90)</sup>と述べた。

類似の論法は章炳麟が早くから既に述べたことがあったが、これは決して胡適に向けられたものではなかった。章氏は世の人が学問をする場合、「好んで外国の事を持ち出し、それによってひき比べ、事情が異なれば誤りとし、事情が同じであれば正しいとする」ことを批判し、このように「外国人の言を聞いては、すなわち膝を屈して襟を正し、まるで天命を受

けるがごとくである」、このようなことで学術はどうして自立できようかと述べた。嚴復（1853～1921、啓蒙家、翻訳家）にはもとより「西洋一往の論」をそのまま写し取って、「それを引用して物事を判断し決定する」という欠点があり、沈曾植（1850～1922）が西洋の学問を引き合いに出すことを完全に認めないという考えには、章炳麟は仮にも同意することができるものではなかった。故に、「個別の相を理解して全体の相を理解しなかった者は、沈曾植であり、全体の相を理解して個別の相を理解しなかった者は、嚴復であった<sup>(91)</sup>」と章氏が述べたのである。どのように中国、西洋の学問を調和させ、「全体の相」、「個別の相」ともに心を配るとするのは、簡単なことではない。章炳麟自身は西洋の学問を摂取することにも非常に注目し、三度日本に渡り、三段階に亘って西洋の学問を吸収し完成させた<sup>(92)</sup>。中国固有の学問について論及すると、章氏はかなり傲慢になり、西洋人など眼中になく、論文で他国の「漢学家」を貶す辛辣な言葉をよく見かける。「本国（中国）の学問を他国に求めることができようか」。このような問題提起は、大いに自己閉塞の気味がある。しかし、章炳麟が真っ正面から立ち向かったのは、主に当時の世に言い囃された「欧化主義」であったのである<sup>(93)</sup>。「自分の考えを基準にし」ないで、専ら「日本や欧州に寄り掛かった」「無聊な新党」を批判して、その著述に必ずや「比附」、「支離」、「謬妄」が現れると述べたが、これはもとより急所をずばり突いているのである<sup>(94)</sup>。ただし、これは章氏の「自らにのみ依り他者に依らない」という一貫した思考回路に立っている。—このように説を立てれば、「自分の考えに偏る」という可能性があることは歴然としている。しかし、世の人の下賤で軟弱であるのに対して、「自ら尊貴すること厚く」、「独立独歩する」ことは依然「中国の前途に有益なのである<sup>(95)</sup>」。

章炳麟のこのような学術態度はその多元的文化観と「斉物哲学」に根ざしている。ここでは暫く「斉ならざるを斉とするのは、下士の妄執であり、斉ならざりて斉であるというのが、上哲の玄談である<sup>(96)</sup>」までは係わらない。と言うのは、これらの「玄談」は二言三言ではっきりと説明できる

ものではないからである。却って、「原学」の一節はその「欧化主義」を批判するのと直接関係がある。

飴、乾納豆、酒、酪は、味は違うが、どれも美味しい。今中国が西洋に心を委ねることができないのは、ちょうど西洋が中国に心を委ねることができないのとおなじである<sup>(97)</sup>。

このような論法は多分胡適には受入れられ難かったであろう。留学時期に、胡適は「私は家庭のことは東洋人の法に従い、社会、国家、政治の見解は西洋人の法に従う」と述べ、その上、後世の人も彼の人となり、学問がいずれも「三部の舶来品七部の伝統」であることを認めていたに係わらず、しかし数十年間の東西文化論戦では、胡適の基本的立場は疑いもなく「欧化」であった。東西文化の違いを「進歩の程度の違い」と理解し、そのため進んだ西洋文明で後れた東洋文明を改造することに尽力した胡適先生<sup>(98)</sup>は、著作をものし、学説を立てる場合、当然西洋の学問を「変化を解釈する道具」とする傾向があったのである。現代中国の不世出の大学者である、胡適が学問する場合、懐疑精神と歴史的視点を重視し、常に自己のそれまでの具体的観点を修正してきた。しかし、胡適先生はただ西洋の学問で中国文化を裁断するという学術思考回路をそれ程「懐疑」しなかった。50年代、かつて『中国哲学史大綱』で、生物進化論によって莊子を比較したことを再検討し、結局「全く『種の起源』という不朽の名著を辱めた」と結論づけた。胡適先生はどうして『莊子』という同様の不朽の名著を「辱めた<sup>(99)</sup>」ことを反省しないのか。先生が研究したのが「哲学史」であって、「生物史」であることを知るべきであり、そうであればお詫びを言うべきは、まず莊子に対してであり、ダーウィンに対してではない。このような微妙なところに胡適の価値観を見いだすことができる。亡くなる三カ月前に行った最後の重要な講演「科学の発展が求める社会改革」から見ると、胡適先生はただ中国文化に対する偏見を改めていないだけでな

く、その上依然西洋の観念で中国思想を裁断することにあくまで固執した  
のである。

章炳麟、胡適の東西文化観とそれに関連を持つ哲学思想は決して本稿の  
論述の重点ではない。ここではただ中国文化に対する評価の違いから、  
「国故整理」の策略の違いが導き出されたことを指摘するに留めておく。  
すなわち、章氏は「中国の長所」を発掘することを重視し、一方胡氏は  
「中国の伝統文化に存在する、妖怪を捉え」「幽霊を打つ」ためにした。そ  
の結果、章氏は古人（中国）の立説の苦衷を体得することを強調し、一方  
胡氏は今人（西洋）の思想の合理性を突出させた。そして、章氏は「守旧」  
した後で「新しさを出す」ことを主張し、一方で胡氏は古いものを打破し  
てはじめて、新しいものを立てることができると考えたのである。

20年代以降の中国の学界は学術思考回路について言えば、基本的には胡  
適の道を歩み、章炳麟の道を歩まなかった。ここで私は定論を覆す文章を  
大いに著し、これに取って代わろうとする気は全くない。ただ埋没させら  
れた「もう一つの可能性」を発掘しようとしただけである。胡適の「科学  
的方法」、「文化思想」や「著述スタイル」には、当然ながら合理性がある。  
しかし数十年、この学術思考回路は主流の地位にあったため、日にその内  
在する欠陥を露にしているのである。章氏をはじめとする、相対的には古  
く且つ忘れられた「学問」の伝統を理解することは、我々が学術思考回路  
を整理統合するのに役立つかもしれない。このような着想から、本文では  
章炳麟先生の学術上の明らかな「党派的偏見」についてはあまり取り上げ  
なかった。

1994年3月11日 東京、白金台にて

〔原注〕

- (37) 錢穆：『中国近三百年學術史』第359頁（北京：中華書局，1986年）；侯外廬：『近代中国思想學說史』第379頁。
- (38) 「戴東原在中国哲學史上的位置」（『胡適學術文集・中国哲學史』第1106頁）。
- (39) 『近代中国思想學說史』第七章第二節「戴東原學術底歷史的地位何在？」を参照。
- (40) 余英時『論戴震与章学誠』（香港：竜門書店，1976年）の「自序」と第三章「儒家知識主義的興起」を参照。
- (41) 高田淳『辛亥革命と章炳麟の齊物哲学』（東京：研文出版，1984年）の「章炳麟の戴震論」を参照。
- (42) 「戴東原在中国哲學史上的位置」（『胡適學術文集・中国哲學史』第1106頁）。
- (43) 章炳麟：「東京留学生歡迎會演說辭」（『民報』第六号，1906年7月）。
- (44) 錢穆：『中国近三百年學術史』第359頁。
- (45) 章炳麟：「諸子略說」（『章氏国学講習會講演記録』第7、8期）。
- (46) 胡適：『戴東原的哲学』第56頁（上海，商務印書館，1927年）。
- (47) 『戴東原的哲学』第53-55頁、『近代中国思想學說史』第384-386頁を参照。
- (48) 『章氏叢書』本『荀漢微言』第47頁。
- (49) 『戴東原的哲学』第192頁。
- (50) 『章太炎全集』第三卷157、162頁を参照。
- (51) 章炳麟：「悲先戴」（『民報』第九号，1906年11月）。
- (52) 「清儒」は『尙書』重訂本に見え、「經的大意」は『章太炎の白話文』に見える。；晩年「經学略說」を著したが、章氏は依然「『孟子』は子部に入れるべきである」と主張した。
- (53) 『章太炎国学講演集』第115-116頁、139頁と「說新文化与旧文化」（『太炎学說』，1921年）を参照。

- (54) 「論墨学」(『胡適文存』二集卷一第221頁)。
- (55) 『戴東原的哲学』第26頁、82-83頁、103頁、196-197頁、142頁、97頁。
- (56) 『清代學術概論』(『梁啓超論清学史二種』第78頁、6頁)。先ず蔡元培が「『中国哲学史大綱』序」で「胡適先生は代々「漢学」を伝える績溪の胡氏に生まれ、生まれながらに‘漢学’の遺伝性を持っている」と述べた。後にまた梁啓超も胡適を代々経学を伝える「績溪の諸胡の後裔」に列した。このような胡適にかなり有利な「誤解」について、胡適先生は五十年代に自伝を口述する時になって、やっと訂正した。(『胡適的自伝』第一章を参照) 故に議するべきところがないわけではない。
- (57) 章炳麟：「時学箴言」、湯志鈞『章太炎年譜長編』第661頁(北京：中華書局、1979年)から転録。
- (58) 許寿裳：「紀念先師章太炎先生」(『制言』第25期、1936年9月)。
- (59) 『章氏叢書』本『蕪漢微言』第52頁。
- (60) 『章氏叢書』本『蕪漢微言』第72-74頁と『太炎先生自定年譜』第53-54頁を参照。
- (61) 章炳麟：「致宋燕生書三」(1900年10月1日)(『中国哲学』第九輯)。
- (62) 胡適『四十自述』(上海：亞東図書館、1933年)。
- (63) 『胡適留学日記』第654頁(上海：商務印図書館、1947年)。
- (64) 『中国哲学史大綱』の「導言」で「述学の困難なのは、史料が不完全であったり、あてにならないからである」と述べた。；五十年代、『中国古代哲学史』台北版自記』の中で、胡適はやっとそれが「当時かなり先駆的意味を持った」「特別の立場」、つまり「哲人一人一人、学派一つ一つの‘論理学’の方法を把握するというものにあった」ことを強調した。
- (65) 『胡適留学日記』第563頁、『胡適之先生年譜長編初稿』第2773頁(台北：聯經出版事業公司、1984年)と唐德剛『胡適雜憶』第37頁(台北：伝記文学出版社、1980年)を参照。

- (66) 蔡元培：『中国哲学史大綱』序；馮友蘭：『三松堂自序』第223頁（北京：三聯書店，1984年）。
- (67) 蔡元培『中国哲学史大綱』序と顧頡剛『古史辨』第一冊自序を参照。
- (68) 『胡適學術文集・中国哲学史』第28頁。
- (69) 鄭振鐸：「研究中国文学的新途径」[『中国文学研究』第4頁（上海：商務印書館，1927年）]。
- (70) 「新思潮的意義」[『胡適文存』卷四第162頁（上海：亜東図書館，1921年）]；「『国学季刊』発刊宣言」[『胡適文存』二集卷一第11-18頁。
- (71) 『胡適作品集』本『五十年来中国之文学』第104頁（台北：遠流出版社，1988年）。
- (72) 『胡適留学日記』第752頁で、中国人が「据」に慣れて「証」を理解しない、すなわち「經典の言を据として、それによってその説を明らかにする」ことしか知らず、事実や法理に依って帰納、演繹することを理解していないと批判した。馮友蘭は『三松堂自序』第216頁で、『中国哲学史大綱』が古人のために注を著し古人の言葉を主とするという伝統的著述スタイルを改め、「自分の言葉で本文を著し」、当時の青年学生の心を打ったと述べている。胡適は學術的著作の「スタイル」をかなり重視し、1937年2月22日の日記で、陳寅恪の歴史学研究が學識が深くその上見識があることを賛嘆するとともに、「ただし彼の文章は実に書き方が優れておらず、標点の付け方は特にだらしなく、手本にすることができない」と指摘することも忘れなかったのである。
- (73) 蔡元培『中国哲学史大綱』序、陳寅恪が馮友蘭の『中国哲学史』のために書いた「審査報告」及び素痴（張蔭麟）の「評胡適『白話文学史』上卷」[『大公報』1928年12月3日]を参照。張の文章では胡適の『白話文学史』が「方法の上で、わが国文学史の著作の中で、新しい道を切り開いた」と褒め、その中で多くは學術的思考回路や著述スタイルについて述べている。



- (74) 「章太炎来簡」(『新民叢報』第十三号, 1902年)。
- (75) 章炳麟: 「中国文化的根源和近代學術の發達」(『章太炎の白話文』第22-23頁)。
- (76) 章炳麟「論学会有大益于黄色人種亟宜保護」(『時務報』第十九冊, 1897年3月)、「留学的目的和方法」(『章太炎の白話文』第1-12頁)、「与王鶴鳴書」(『章太炎全集』第四卷151-153頁)を参照。
- (77) 「救学弊論」(『章太炎全集』第五卷102頁(上海人民出版社, 1985年))。
- (78) 陳平原「章太炎与中国私学傳統」(『学人』第二輯)と「小説史: 理論与实践」第26-33頁(北京大学出版社, 1993年)を参照。
- (79) 『太炎先生自定年譜』第14頁。
- (80) 章炳麟主講、曹聚仁記述: 『国学概論』第108頁。
- (81) 梁啓超: 「治国学的兩条大路」(『時事新報・学灯』1923年1月23日)。
- (82) 梁啓超: 「評胡適之「中国哲学史大綱」」(『時事新報・学灯』1922年3月13-14日)。
- (83) 章炳麟: 「致胡適之」(白吉庵「胡適伝」第119頁より転録)。
- (84) 章炳麟が1933年に講演した「歴史的重要」(『制言』第55期)を参照。
- (85) 「胡適の日記」440頁(香港: 中華書局, 1985年)。
- (86) 「『胡適文存』序例」、『胡適的自伝』第五章「実証思惟術の節と『自述學術次第』」(『太炎先生自定年譜』第53頁)を参照。
- (87) 胡適の「論墨学」に収められた二通の書簡と「『国学季刊』発刊宣言」を参照。
- (88) このことで、胡適が仏教学や文学をわかっていないと嘲笑する人がよくいるが、これはあまり公平とは言えない。胡適先生の弁解は次の如くである。: 「文学を研究するのに二つの見方がある」、彼の小説についての考証は「文学史」に属し、文学批評ではない(『胡適講演集一』第240頁, 遠流出版公司, 1986年); 禅宗史を研究するにも二つの基本的立場がある。鈴木大拙や柳田聖山は外でもない「禅宗の信

- 徒」であり、私は中国思想史の‘学徒’であり、どのような宗教も信仰しない（『胡適手稿』第七集上冊卷一第31頁、台北胡適記念館刊行）。
- (89) 馮友蘭の『中国哲学史』「自序」と陳寅恪、金岳霖がそれぞれ馮のために書いた「審査報告」を参照、『中国哲学史』（上海：商務印書館、1930、1933年）に見える。
- (90) 金岳霖：「『中国哲学史』審査報告」。
- (91) 「信史 上」（『章太炎全集』第四卷64頁；『章氏叢書』本「薊漢微言」第50頁）。
- (92) 唐文權、羅福惠：『章太炎思想研究』第二章（武漢：華中師範大学出版社、1986年）を参照；近藤邦康：「章太炎と日本」、『先驅的蹤迹』29-45頁（杭州：浙江古籍出版社、1988年）に見える。
- (93) 「留学的目的和方法」、「東京留学生歡迎会演説辞」を参照。
- (94) 「教育的根本要從自国自心發出來」（『章太炎的白話文』第61頁、69頁）。
- (95) 「答鉄錚」（『章太炎全集』第四卷371頁、374-375頁）。
- (96) 『齊物論积淀本』（『章太炎全集』第六卷61頁（上海人民出版社、1986年））。
- (97) 章炳麟：「原学」（『国故論衡』第149頁（上海：大共和日報館、1912年再版））。
- (98) 胡適の東西文化比較に関する論述は多く、ここでは省略する。『胡適留学日記』第443頁の「家庭のことは東方人のやり方に従う」についての態度の表明、唐徳剛『胡適雜憶』の「三分洋貨七分伝統」の章、及び耿雲志『胡適研究論稿』の「評胡適的中西文化觀」の章（成都：四川人民出版社、1985）を参照。
- (99) 『『中国古代哲学史』台北版自記』（『胡適學術文集・中国哲学史』第5頁）。

付 記

本訳稿は、陳平原氏の「章太炎与胡適之關於經学、子学方法之爭」の後半部分（第四章から第六章）の翻訳である。前半部分の翻訳は本紀要前号すなわち八号に既に発表した。そちらの解題に、陳氏の略歴、本論文の概要は既に述べてあるので、ここでは重複を避け省略する。どうか、そちらを参照して頂きたい。

また、今回は、紙幅の関係で、訳注は最小限に留め、かつ本文に（ ）で括って挿入した。更に原文では同一人物の名前が時に字であったり、時に号であったりするが、訳文では名に統一した。

最後に、本論文は既に前号解題に述べた如く、講演原稿であるが、陳氏が主編を務める『学人』の第六輯（江蘇文芸出版社、1994年9月）に収められたことを付け加えておく。なお、訳文に誤訳や生硬な表現があれば、それは全て訳者の責任である。諸賢のご叱正を心から請う次第である。